

令和 2 年度 第 3 回 仙台市社会福祉審議会 地域福祉専門分科会 議事録

1 日時 令和 2 年 9 月 8 日（火）午前 10 時 00 分～午前 11 時 45 分

2 場所 フォレスト仙台 2 階 第 7 会議室

3 出席者

[地域福祉専門分科会委員] 14 名（委員定数 17 名）

阿部重樹委員	伊丹さち子委員	大内修道委員	小川登委員	小岩孝子委員
島田福男委員	庄子清典委員	立岡学委員	釣舟晴一委員	寺田清伸委員
長岡弘晴委員	三浦啓伸委員	渡邊純一委員	渡邊礼子委員	（五十音順）

[事務局]

○健康福祉局	熊谷健康福祉局次長	西山社会課長
	柴田総務課長	和泉社会課被災者支援担当課長
	太田保護自立支援課長	菅原障害企画課長
	高橋障害者支援課長	白岩高齢企画課長
	松本地域包括ケア推進課長	

○子供未来局 富田総務課長

[オブザーバー]

○仙台市社会福祉協議会より 4 名

4 次第

- (1) 開会
- (2) 会長挨拶
- (3) 議事
 - ① 第 3 期仙台市地域保健福祉計画の進捗管理・評価について
 - ② 「（仮称）せんだい支え合いのまち推進プラン」の構成案について
- (4) その他
- (5) 閉会

5 内容

- (1) 開会
- (2) 会長挨拶
- (3) 出席状況の報告
 - ・ 3 名の委員が都合により欠席される旨を報告
 - ・ 過半数の委員の出席により、定足数を満たしていることを報告

(4) 議事

- ・ 議事録署名人について、寺田清伸委員を指名→寺田委員承諾

議事① 第3期仙台市地域保健福祉計画の進捗管理・評価について

○社会課長

資料1により議事内容・論点等説明

○阿部会長

それでは令和元年度の自己評価を受け、本分科会としての第3期仙台市地域保健福祉計画の進捗管理・評価についてご意見いただきたい。後日、本日審議いただいたものがホームページで公表されるため、特に資料1の10ページ記載の「仙台市地域福祉専門分科会による評価」に焦点を当てた質問・意見をいただければと思う。

なお、資料1の8ページまでに記載の、施策ごとの自己評価についての質問を拒むわけではないので、質問や疑問に思い説明を求めたいということがあればそれでも差し支えない。

○島田委員

(資料1の)10ページの「仙台市地域福祉専門分科会による評価」の1項について、「若年層や女性等、多様な主体が地域活動へ参加しやすい仕組みづくりのため～」とあるが、私もまさにそのとおりだと思う。

それで、4ページの「施策ごとの自己評価」中、仙台市地域防災リーダー（以下SBL）のことなのだが、現在SBLとして活動をしている方は確かに高齢の方が多い。私の地域でも5人のうち2人が今年高齢のため辞めることになった。

ところが今年はSBLの講習がなく、一年間は3人で活動をするようになった。若い方を入れるために公募しているが、公募で入った若年層や女性層は地域とか町内会に無関係で応募するので、実際にSBLになっても地域とあまり関わりを持ちたがらないことが多い。

実際のところ、「おたくの町内会にはこういう人が公募で来て、SBLがいる」といっても、町内会とSBLに接点がないところも多い。

公募の際にも地域と共に活動できる人、と説明が設けられているが地域に入っていない。地域から迎えにいかないことが悪いのか、わからないが、その辺りをもう少ししっかりできたらよいのではないかな。

○阿部会長

現状についてご指摘いただいたと思うが、何か事務局からあるか。

○社会課長

資料1の13ページがSBLに関しての個別評価シートになっている。13ページの項目8の(3)に講習会を「連合町内会長へ案内した」という記述はあるが、それが各地域で上手く機能

しているかに関わる意見として担当課に伝えたい。

若者や女性等の地域活動参加への取り組みについては、広報の仕方を工夫したい旨を担当課でも述べており、今まで市政だよりやホームページ中心に参加募集をしてきた現状に加えて、例えば、若者や女性が多く参加するイベントで、ターゲットを絞って周知することを考えているようだ。

○阿部会長

(町内会と) 担当課との間で若干現状認識に差があったという点で、客観的評価としてよいご指摘をいただいたと思う。

○渡邊礼子委員

私も公募で SBL になっている。町内会には、推薦で SBL になっている人、それから公募で SBL になっている人のうち、女性が 2 人いる。防災会議とか防災マップ作成の打合せとかに積極的に参加してもらうように、町内会から声がけしていただけないと、参加してよいのか本人自身も悩んでいるのではないかと。声がけ次第だと思う。

私の場合、実際に東日本大震災の際に女性のそういう体制ができていなかったもので、これは大変だと感じて公募で申込みをして町内会に積極的に入っていった。しかし、地域に入るといのは大変難しいので、町内会から声がけをして来ていただくという方法もよいのではないかと。

○阿部会長

今後の充実に向けて、現状を踏まえた提案ということでよろしいか。その他に意見はないか。

○長岡委員

全体評価(資料 1 の 10 ページ)の最後の部分に、「ひきこもり支援体制評価委員会での課題の整理～」という部分がある。この中に「医療機関と連携した妊産婦支援事業の拡充、企業と地域のマッチングの仕組みづくり等～」とあるが、実は私ども保護司をしている立場から申し上げると、地域との関わり、あるいは家庭との関わりの中で非常に手を焼くケースがある。ひきこもりイコール精神疾患ではないので、誤解を招く表現はしたくないのだが、要するにうつ病や、多い事例だと依存症等、そういう精神疾患を抱えた人たちのケアが悩ましく、医師と連携して対応したいことがある。しかし、守秘義務があるので保護司といえどもなかなか対応できない部分がある。

上手くいくケースとして、子供がいる場合は児童虐待の懸念があることから家庭健康課など行政が動く。私のケースでも 2、3 歳の子供がいて親が薬物依存で統合失調症という事例があり、行政に非常によく面倒をみていただいた。しかしながら、そうでないケースだとなかなか上手く支援が入らない。

ところで、精神科医も病院から出ないタイプや、アカデミズムの世界に入る方、それから地域に入って動くタイプと様々である。病院としての特徴にもよるが。そうした中で、保健師の方等が家庭を定期的に訪問し、問題を抱える人たちの状況を確認できる制度が必要なのではな

いか。一般人が家庭内の問題に介入したり指導したりするのは非常に難しい。

ニュースに取り上げられたが、町内会の役員を引き受けるよう頼まれた方が、何らかの精神疾患を持っており、できないとなった。そうしたら、町内会役員を断る理由を書きなさいと言われ、結局自殺してしまった。非常に不幸な出来事で、少なくともこうした事態は避けていただきたい。

できるだけ皆と一緒にやろうという中でエスカレートした不幸な出来事なのだが、そういう事例を考え、是非この中で妊産婦支援事業だけでなく精神疾患、特にひきこもりとの複合ケースとか、そうした場合の支援拡充のあり方について、課題として載せていただきたい。

○阿部会長

今後の取り組みでさらに必要な点として、保健師の活用が必須とまではいかないにせよ、重要なポイントになっているのではないかという提案だったと思うが、事務局から今日の時点で何か回答、対応いただけるようなことはあるか。

○社会課長

資料 1 の 10 ページ 5 項については、前半で令和元年度の実績について評価し、後半では今後の話をしており、ひきこもりに限らず複合的な課題または地域の抱えている課題について、取り組みの方向性を示しているところである。

保健師の活用については、令和元年度から各区役所の障害高齢課に、既存の高齢者支援係と障害者支援係に加えて地域支援係を創設し、幅広く分野にとらわれず、地域に関わっていける体制づくりに努めているところである。ただ、まだまだ不十分なところもあるので、今後に向けた意見として受け止めたい。

○阿部会長

今後さらなる取り組みをお願いしたい。他に何かあるか。なければ議事①について、(資料 1 の) 10 ページ記載の「【仙台市地域福祉専門分科会による全体評価】(案)」について、この後に手続きを経て公表することについて、ご承認いただけるか。

なお、会議終了後に出てきた意見の取扱いについては、事務局と共に会長に一任いただき、仙台市のホームページで公表することについて、ご承認をいただいたものとしたい。事務局もそれでよろしいか。

(各委員・事務局承認)

○社会課長

説明が十分ではなかった点について、今回の議事等に対して会議終了後に思いついた意見は、机上配付資料の「地域福祉専門分科会（9月8日開催）での議事等に関するご意見（様式）」に記載いただき、9月15日までに提出をお願いしたい。

議事②「(仮称) せんだい支え合いのまち推進プラン」の構成案について

○社会課長

資料 2、資料 3 により議事内容・論点等説明、あわせて参考資料について言及

○庄子委員

資料 3 『(仮称) せんだい支え合いのまち推進プラン』構成(案) 1 ページ目について、全 7 章ある中で、第 5 章と第 6 章に非常に違和感を覚える。第 5 章は「高齢者や障害者の意思を尊重し、生活を支える」という副題のほうがメインであって、そのための方策のひとつとして成年後見制度の仕組みがあるということではないのか。つまり、5 章内の各論として、自分の意志に基づいて生活することが困難な方々への支援の括りで、支援制度のひとつとして契約行為能力や法的能力がない方や不十分な方については成年後見制度があり、その促進をしなければいけないという意味合いだと思う。そのため、ここで章題に成年後見制度がくるのは、全体の流れから違和感があるように感じる。

6 章についても同様である。再犯防止が大変重要なことは立岡委員や長岡委員の話から、強く感じているところではある。しかし、何かで一度挫折し立ち直ろうとする人達のうち、その何かが犯罪であれば再犯防止の話になるが、例えば、DV 被害者や DV 加害者の立ち直り、あるいはアルコール依存症やギャンブル依存症からの立ち直りなど、様々な立ち直りが必要な人達がいる。その支援をすることがメインであり、その中の一部に各論として再犯防止推進も必要であるという括りにしないと、どうしても全体像に違和感を覚える。

○阿部会長

意見としてとりあえず受け止めたい。成年後見制度及び再発防止に関しては今回の地域福祉計画策定にあたって一体的に扱うという趣旨ではあるが、それでも 5 章と 6 章のタイトルは違和感があると。庄子委員が述べたのは、一体的に扱う趣旨があるにしても、もう少し関係するところに溶け込ませてはどうかということだと思う。溶け込ませると一体的に策定したことの見える化が図れなくなる懸念があると思うが、今日時点で事務局から回答はあるか。

○社会課長

成年後見制度利用促進と再犯防止推進については、事務局として計画の一体的策定を踏まえたときに、しっかり別立てで示していく必要があると考え、この章立てにしている。しかし、他の支援制度もある中のひとつであることはそのとおりなので、その点は計画の中でも言及して誤解なく伝わるような形で明示していくことが必要だと受け止めた。次回に向けて検討したい。

○阿部会長

庄子委員、次回までということによろしいか。この議論は基本的に事務局からの回答は最小限に留め、委員の皆様から色々な意見を頂戴したい。

○伊丹委員

本当に単純な質問なのだが、この「(仮称) せんだい支えあいのまち推進プラン」は、誰が見るものなのか。

それから、資料3『(仮称) せんだい支えあいのまち推進プラン』構成(案)」の3ページ目にある両方の図が非常にわかりにくい。誰が見るものなのかと引っかかった。上の図は差替予定となっているが、難しいこの図を見てわかるのかどうか。下の図は、本当にひとりの方がここにある誰ともつながらない場合がある。身寄りがない中で友人も親戚もネット環境も地域とのつながりも全くない、仕事もない、市民活動もサロン活動も何もしない人達がたくさん地域の中にいる。その方達はどこに救いを求めていけばよいのか。そこに焦点を当てていかなければならないと思う。

「寂しくてしょうがない」と包括に連絡が入る。結構70代の方が多い。そこにスポットライトを当てていかないと、本来の意味の支え合いにはならないだろうと、私は常日頃感じている。その辺をもう一度議論していただき、誰がための推進プランなのかをもう一度考えていただきたいと考えた。

○阿部会長

少なくとも3点意見があった。1点目は計画を誰がみるのか、読むのかということについて。これは事務局からすぐ回答をいただけるのではないかと。2点目、3点目は3ページの図にもう少し何らかの説明等を加えないと意図が伝わらないという指摘だったと思う。

○社会課長

まず、この計画は一人ひとりの市民の方に向けて発信していきたいものである。行政だけでなく、一人ひとりの住民や地域の団体にも支え合いの地域ということを考えていただくためにも、見ていただきたいものである。

次に、3ページの図については、図の上に文章があり、その最後の部分で地域におけるつながりとか居場所を作っていくことが大切であると述べている。居場所を作るという部分にスポットライトを当てていきたいというイメージ図であり、本計画で考えているところである。

資料2『(仮称) 支え合いのまち推進プラン』の方向性(修正案)」の基本的方向1「多様性を認めあい、社会とつながる環境づくりの推進」の部分で、社会とつながる仕組みとか居場所を作る取り組みに、大きな柱を建てて取り組んでいきたいことを示しているものである。

○阿部会長

私もいただいたご意見に対して、できるだけ納得をしていただけるように、腑に落ちたと感じていただけるように次回の分科会まで考えたいと思っている。

私からも申し上げますと、3ページの上段の図は地域福祉計画における「地域」が非常に曖昧で、立体的、重層的、深遠的に伸びていく。2005年あたりからこの計画が策定、改訂されるにしたがって、「地域」をめぐる議論がなされ、「地域」が色々な意味でとらえられることを示すため、様々な「地域」のイメージが非常に細かく書き込まれた経緯があった。

また、下段の図は事務局から説明があったように、関係性の欠如・欠落が現代社会の貧困として大きな課題であることを訴えていけるような工夫をしたいと思う。

誰が読むのかということに関しては、冒頭（会長挨拶）で地域福祉計画を全国で作り始めたときは盛り上がったという話をしたが、地域住民が参画して作るということになり、どこの自治体も相当盛り上げに苦慮したというか、時間を割いた。その名残が住民座談会を細かく開催することで、仙台市の場合は良心的で、その仕組みが残っている。他の自治体では住民座談会は結構残っていないくて、こうした委員会だけで計画策定してしまうところはかなりある。改めて、住民の方々へ訴えるということを意識し、見せ方を考えることとして受け止めたい。私が答えてしまったが、今日は答えではなく意見を色々いただきたい。

○寺田委員

資料2『(仮称) 支え合いのまち推進プラン』の方向性(修正案)」の方向性全体については、各委員からの意見が全て反映されていてしっかり整理していただいたと思っている。

個別の表現について、資料3『(仮称) 支え合いのまち推進プラン』構成(案)」の2ページ目「目指すべき姿」の本文で4行目、5行目、7行目の「生きづらさ」という表現に個人的に反応してしまった。こういう表現は最近使われるようになったのか、出典があれば教えていただきたい。

「つらさ」という表現は、どうしても個人の主観的心情を含んでいる感じがする。大変な課題を抱えていても、生きづらいと思わない人もいる一方で、周りから見ると相当恵まれている様子でも生きづらいと思う人もいるのではないか。「つらい」という単語に「生きる」がつくことで、「いずれあなたも生きづらくなる」「明日は我が身、自分事としてとらえましょう」と言われているような気がして、計画の冒頭から重たい印象を受ける。ただし、代案があるかと言われると、生活課題とか、生活上の困難とか支障くらいしか出てこないの、他の委員の皆様から意見を聴きながら、自分なりに考えていきたいと思う。個人的にはこの表現に反応してしまった。

○阿部会長

少なくとも寺田委員が反応し、発言するほどの要素を含んだ表現だということなので、別の表現を考えるか、あるいは修飾語句等による説明を補って趣旨が伝わるように事務局と私のほうも考えてみたい。

○立岡委員

まず、生活困窮者自立支援をどう考えるかについて、包括的相談のような、断らない相談を障害関係、高齢関係、児童関係、困窮関係各々がどのように受け持つのか、国から今後形が示されていく中で、仙台市としてそれぞれの領域で包括的に断らない相談をやっていくのか、それとも内容が困窮ならば困窮関係とか、どこかが中心となって取り組むのかで書き方が多分変わってくるのだと思うので、そこをどう位置づけるのか思案が必要と感じている。

次に、資料の順に沿って申し上げるが、2ページ目の第2項で「震災等で被災し心のケアや

生活のための支援が必要な方」という文言を見たときに、今被災者に関する生活支援とは何だろうかと考えて、復興公営住宅に入っている人とかはもう自立した人とみなされている中で、災害援護資金を借りている人を思い浮かべたのだが、実際はどんな方達になるのだろうか。見守りが必要な方なのか。今、「被災」の定義は何だろうと思った。

そして「生きづらさ」について、生きづらさを抱えている人というのは（既成の支援制度とはなじまない、しっくりこないような）「はまらない人」みたいな、そんな感じを大雑把に表現しているのかなと思う。困窮支援の現場にいと「なんか生きづらいよね」「生きにくいよね」「この人なんか不器用だよ」というような、そういう人とたくさん出会うのだが、そうした「はまらない人」がたくさんいることを表現しているのではないかと感じた。

4 ページについて、ここは様々な主体がいる中で、再犯防止の部分については保護司と厚生保護施設、自立準備ホームがこの枠組みの中に入り、多様な協働の主体として埋め込まれる必要があるのではないかなと思う。

8 ページについて、具体的なところで、この中に入れるものとして外国人の相談がある。社会福祉協議会（以下社協）では外国人への貸付けとかで色々と苦慮している部分もあるだろうし、何らかの形で外国の方に関しても共生の枠組みの中に入れておく必要があるのではないかな。

9 ページの住まいの部分について、具体的施策内容として住宅確保要配慮者居住支援法人の活動の充実といったことが出てくるのではないかな。住宅確保要配慮者向けのセーフティネット住宅がなかなか普及しない現状は、面積基準に要因があって、宮城県でも仙台市でもセーフティネット住宅の床面積要件を 25 m²以上としているからである。これを 18 m²程度にすると 1K アパートがセーフティネット住宅として一定程度市場に出回ってくる。それで、物件が借りられるときに保険等が適用されていくと思うが、そうした具体的部分をどこまで計画に載せるのかという議論はあるにせよ、こうした内容は必要なのではないかなと思った。

あとは、親亡き後の障害者の方が地域でどのように生活していくのか、その住まい提供を市場に任せるだけでよいのかも思案所であり、住まいというところの中に入ってくるのではないかなと感じている。

次に、10 ページになるのだろうか、町内会について。町内会があって、そこに加入している人達はまだ町内の人の目があるからよいのだが、町内会未加入の人達に対してどのようなサポートをしていくのか。未加入の人達自身の責任という（支援など行わない）形になるのか、あるいは町内会未加入の人を何らかの形で包摂していく必要があるのかの検討が今後求めていくのではないかな。

11 ページには地域差が広がっているとあるが、パンドラの箱を開けてしまうようなことを申し上げると、地域差が広がっている中で上手くいっているところと上手くいっていないところがあって、仙台市内で人口減少の中において、上手くいっていないところは見切りをつけるのか、それとも光を当てて支援していくのか。地域保健福祉計画に書くべきものなのかわからないが、こうした部分も、今後の人口減少社会において仙台市で暮らしていくといったときに、まとめていかなければいけない時期が絶対くるだろうと思う。

本当に理想論だけをずっと書き続けてよいのか、非常に難しいところだが、仙台市としてどうするかを考えていくことは必要なのではないかな。例えば、仙台市では、地域の町内会を育成

するような事業に取り組まれていると思うが、現実には難しいので、プロフェッショナル的に町内会活動を後押しする団体とか、町内会の代替となる活動を進めていくような団体の活用等を考えつつ、町内会活動を盛り上げていくようなことも考えていかないといけないのではないかな。

最後に 15 ページ、再犯防止のところでは 3 点ほど。1 点目は保護司の成り手について、現在保護司の成り手が充足されておらず、青葉区では 70 数名の必要数に対して 60 数名だと聞いている。成り手がない中で、良し悪しは別として、役所職員が兼務するとか社協職員が保護司になるとか、自治体の中でも保護司を充足していくために色々な人を推薦していきながら、罪を犯した人達に寄り添っていくのだという姿勢を示す必要があるのではないかな。

2 点目はシェルターの機能について、どうしても罪名によっては更生保護施設では受け入れできないという場合、基本的には「清流ホーム」が最も困難を抱える人達をほぼ一手に受け入れているという現実があると感じており、シェルターの機能の拡充も何らかの形で盛り込んでいく必要があるのではないかなと思っている。

そして 3 点目は罪を犯した人に対するサポートについて。罪を犯した人で、少し年齢が高く成育歴をたどれないと、必要でも障害認定できない場合がある。しかし、本人が生きづらさを感じており、本当は制度を活用したほうがよいといった場面では、罪を犯した人の成育歴をたどれなくても、積極的な制度活用によりサポートする体制は絶対に必要だと思うので、そういったところは書き込んでもらいたい。

○阿部会長

立岡委員から多岐にわたり、計画への書き込みに関わる提言等かなり具体的にご提案をいただいた。例えば住宅供給に関わること、それから保護司の充足に関わることなど、事務局で対応について次回まで検討していただければよろしいかなと思う。他に意見はあるかな。

○小川委員

先ほど、立岡委員も話したところで、地域の考え方、とらえ方について、資料 3 の 2 ページ第 5 項のところでは「自助」「共助」「公助」の 3 つに集約されているが、3 ページ目の上の図にある、隣近所という部分のように、町内会に入っていない方も含めて小さいグループを作ればよいかなと思っている。私的には「互助」という言葉を使っている。「自助」「互助」「共助」「公助」という形で隣近所の方と付き合っていける、そうした体制を作っていけば自然に地域とつながっていくのではないかなと思うので、「互助」という言葉も検討してもらいたい。

○阿部会長

「互助」という言葉についての検討も事務局でお願いしたい。従来は「自助」「共助」「公助」だったが、現行計画策定の頃から「互助」という言葉が出てきた。このまま「自助」「共助」「公助」の体裁をとるにしても、背景に「互助」という言葉を検討したプロセスを示す意味でも、書き込みがあったほうがよいと思う。

まだまだ意見があろうかなと思うが、事務局から分科会での議事等に関する意見募集様式が配られているので、気づいた点があればペーパーを事務局に提出してほしい。

それから寺田委員から「生きづらさ」の語感について、主観で構わないので「生きづらさ」という言葉についての感想や、代替案の提案などいただければと思う。

この辺りで締め括らせていただいてよろしいか。

○健康福祉局次長

少し私の考えを述べたいと思う。計画全体の構成について、庄子委員から成年後見制度利用促進と再犯防止推進が章題となっていることへの違和感の話があった。この計画は一体的な計画として策定する側面がある一方で、成年後見制度利用促進と再犯防止推進の事業計画部分も記載しなければならない。例えば高齢関係の計画ならば、高齢者福祉計画と介護保険事業計画が一つの計画として策定されている。今回この計画策定にあたり、成年後見制度と再犯防止の部分は他の計画にないものなので、事業計画を何らかの形で載せなければならない。構成については様々な考え方があろうかと思うが、私どもとしては何らかの形で明記したいと考えている。

生活困窮者自立支援についても、事業計画として盛り込む必要がある。どのような形にするかは、さらに意見をいただきたところだが、何らかの形で書き込んでいく必要があると考えている。

「生きづらさ」の出典について話があったが、明確な出典はおそらくないと思う。ここ数年、厚生労働省などの各審議会でも社会福祉の様々な分野で一般的に「生きづらさ」という言葉がおそらく使われている。その前は生活しづらさとか生きにくさといった言葉が使われていたかと思うが、今は専ら「生きづらさ」が多用されていると感じる。

重たいという話もあったが、社会保障では、誰しもがこういう状態に陥る可能性があり、だからこそ他人の問題ではなく、自分の問題としてとらえる必要があると考える。今回の地域共生社会の実現に向けた取り組みも「我が事・丸ごと」として提唱された。重たい問題かもしれないが、我々自身の問題でもあることを伝えていかなければならない。大なり小なり誰もが抱えている問題を他人事にしないという趣旨で、どういう言葉がいいのか、改めて検討したいと思う。

事業計画の話をしたが、全ての事業を計画に盛り込めないことを今の段階で謝っておきたい。今回ちょうど高齢分野の「市高齢者保健福祉・介護保険事業計画」や障害分野の事業計画部分にあたる「障害福祉計画」「障害児福祉計画」も改定になるので、必要な施策はそうした各計画に盛り込みつつ、足りない部分あるいは横断的に本計画に載せなければならない部分は、私どもでも整理して掲載したいと思っている。

○阿部会長

次長から事務局を援護するような力強いご発言をいただいた。また、私たちも納得がいくような形で大胆にはっきりと発言いただいたと思う。

さて、少なくとも2番目の議事に関して皆様から色々な意見を頂戴した。例えば3ページの図に関する意見や「生きづらさ」の語感についての意見、違和感を覚える章立て、「互助」の話など、計画を見る・読む方々の視点に立った発言・指摘をいただいたと思う。どのように見せ

ていくかという工夫が色々なところで求められていると感じた。

それから私見になるが、立岡委員がパンドラの箱と表現した部分について、この地域福祉計画あるいは地域福祉活動計画という構想が始まり出した頃から、当時の社会保障審議会における地域福祉部会等の報告文書に「福祉文化の創造」という言葉がでていた。1997年から2003年あたりまででその言葉がフェードアウトしていくのだが、地域住民による生活に根差した社会活動の積み重ねにより、それぞれの地域に個性ある福祉文化を創造していくという要旨であった。

文書では触れられていないのだが、地域住民の主体性を喚起し、「互助」や「共助」の意識を醸成することも含んでいたのではないかと当時理解していた。そして、当時から約20年経過し、今日生じている地域差というのは、福祉文化創造の結果として当初から想定されていたのではないか。

今回、改めて仙台市の地域保健福祉計画策定にあたり、意識や文化を醸成する取り組みも必要になろうと思っている。国としても、もう一度盛り上げていく必要があるのではないかと考えている。

(5) その他

○阿部会長

それでは次第の4、その他だが、委員の皆様から何かあるか。なければ、事務局から。

○社会課長

様々なご意見どうもありがとうございました。冒頭で説明したとおり、この場で話ができなかった点、後から気づいた点などあれば「地域福祉専門分科会（9月8日開催）での議事等に関するご意見（様式）」に記入の上、9月15日（火）まで事務局宛てに送付いただきたい。また、次回分科会は10月中旬に予定している。事前配付した日程調整表を記入の上、9月15日（火）まで事務局宛てに送付いただきたい。

○阿部会長

では以上で本日の分科会を終了とさせていただきます。長時間にわたり積極的にご意見いただいたことにお礼申し上げて、分科会を締めさせていただきます。

(6) 閉会